年　組　名前

道新でワークシート

低水温活用 秋冬出荷狙う

トラウトサーモン 釧根で養殖実験

【釧路、根室】今春、トラウトサーモン（ニジマス）の海面養殖の実証実験が釧路、根室管内で相次いで始まった。低い海水温を生かし、道内外の先行地域と出荷時期をずらし、高価格での取引を目指す。釧路、根室管内の天然サケ・マスの水揚げは10年前と比べ4分の1程度に減少するなど苦戦。道東のサケのブランド力を生かしつつ、起死回生を図る挑戦が始まる。

釧路港で始まったトラウトサーモンの養殖の実証実験。幼魚4800匹が直径14㍍のいけすに投入された＝5月25日（小川正成撮影）

5月25日、釧路港の岸壁で直径14㍍のいけすにトラウトサーモンの幼魚約4800匹が投入された。釧路市と釧路市漁協などによる市養殖事業調査研究協議会と水産商社ニチモウ（東京）が始めた事業で、8～10月の水揚げを予定する。秋の水揚げにより国内では珍しい養殖の魚卵出荷も目指す。同協議会の檜森重樹会長は「天然サケを待っているだけでは廃業漁業者が増えるだけ」と話す。

根室市内でも今春、ニチモウの技術支援を受け、落石漁協が4千匹、市と市内4漁協が3千匹のトラウトサーモンの海面養殖試験を開始。11月末から水揚げし、クリスマスや年末年始の需要取り込みを狙う。根室漁協の大坂鉄夫組合長は「サケは長年根室の水産業を支えてきた魚種。養殖を成功させ、若い漁業者が将来を展望できるレールを敷きたい」と話した。

天然サケ低迷 ブランド力生かし挑戦

1次産業の今

トラウトサーモンは脂乗りが良く、回転ずしのサーモンなどで人気だ。既に青森県や広島県、道南の八雲町などで海面養殖が進み、関東などでは大規模施設での陸上養殖も進む。ただ、養殖には水温20度以下の環境が必要。道南でも夏は水温が25度程度になるため、水温が低い冬に幼魚を入れ6月には水揚げする。

一方、釧路、根室管内は夏季でも海水温が20度を超えることは少なく、国内の養殖地の端境期となる秋冬の水揚げが可能だ。

道東ではこれまで、サケ・マスの水揚げが多かったため、ノルウェーやチリなど海外産が優位なトラウトサーモンの養殖は行われてこなかった。ただ、釧根管内の漁獲は、2011年には2万8千㌧あったが、21年には7千㌧に低迷。取る漁業から育てる漁業への転換が迫られる中、海水温の低さを利用し、先進地に競争を挑む構えだ。

釧根地域は現段階では実証実験にとどまり、ブランド化を進めるには規模拡大が必須だ。北大地域水産業共創センターの福田覚教授（水産科学）は「道東地域の自然環境に応じた生産体制が確立すれば、不安定な天然資源を補う一事業になり得る。市場のニーズ把握と販路確保をしっかりし、利益を出すためのコスト計算も重要だ」と指摘する。

（長谷川史子、川口大地）

2023年 6月28日（水）朝刊　全道版　2ページ　（記事は再編集しています）

① 写真のいけすの中で養殖されている魚は何ですか。

② 釧路、根室管内で養殖実験を行う理由は何ですか。記事中にある様々な理由の中で、自分が最も大切だと思うものを書きましょう。